

氏名	内田 麻ゆ
ヨミガナ	ウチダ マユ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第438号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 違和と彫刻 ～デカルコマニーで見える対称性と浮遊するイメージ～ 〈作品〉 「LILY」 「GIRLS」 「ALICE」 「SWAN」

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	原 真一
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	深井 隆
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	林 武史
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一

（論文内容の要旨）

何気なく見ているものからそれ以上のものが感じられるとき、言葉では表しにくいもの、気になるもの、引っかかるものがある。そしてそれらの違和に気付いたとき「ドキドキ」や「ワクワク」といった、言葉ではそれ以上説明しづらいけれども、気分を高揚させるなにかがある。それは不確かな存在の「気配」である。

私は、デカルコマニーの技法により、左右対称の像、偶然から生まれる像から形を探り、立体へと発展させることを試みてきた。その絵具のしみを見ていると何か見えてきそうで、その実体のわからないものに「ワクワク」し執着心を抱いた。何が描かれているでもない曖昧な模様（平面）を辿り、徐々にはっきりとした形（立体）としてただ何となく存在させてみようというのが最初の目的であった。デカルコマニーは、紙の中心で半分に折ると、その偶然出来る絵具のしみが「ずれ」を含んだ左右対称の像として現れる。今ではそこから見出される形に、双子として生まれた自己を投影し、自身と作品を繋ぐ大事な要素となる可能性を感じている。

本論文では、見方により様々な像が見えてくる、デカルコマニーを作品の構想に取り入れ、視覚的要素を介して、美術と自身の距離感、見える存在、見えない存在への期待と違和の可能性について考察する。

第一章では、対称性について。身近にある左右対称の構造を持つものは身体である。内臓は完全な左右対称でないが、基本的に右目左目、右手左手のように左右対称にあるものであり、頭部や胃など、一つのものは人体のほぼ中心線上にある。

また、一枚の紙を半分に折り転写するデカルコマニーでも、ほぼ左右対称の像が出来る。さらに、元日に飾られる門松や、南大門の金剛力士像、メヂチ家ジュリアーノの墓に見られる昼と夜なども、正面から見て対に配置される。完全な左右対称ではないが、それら対称性のある構図には正面性が現れる。正面性から対称性の効果を探る。さらに対称性、増殖性が現れる鏡という素材を使った美術作品を例に、その効果を解明していく。

第二章では、視覚の操作に関する表現の事象を取り上げる。対称性を持つデカルコマニーには、その偶然現れる像から何かが見えてくるというような、偶然性もある。デカルコマニーの偶然性と、意図的に何かを見せるだまし絵や絵本を絡め、実験的な視覚的操作について取り上げる。

さらに、視覚的に、明らかに違和感のあるスケールの人体を作り、リアルを追及するアーティストもいる。

それらの表現は違和の中にある。日常にある可視的な違和をただ何となく気になるものとして感じているだけでは、美術とは何の関係も生まれない。ところが、そこに執着しているうちに、そこに美が生まれたりするのである。果たして見る人は、驚異的な表現力を見せつけられることになる。偶然の視覚効果と意図的な視覚操作との、美術表現におけるその効果について考察する。

第三章では、「不確かな存在」について述べる。目に見えないものは、“なんだかわからないもの”として人々の想像力を駆り立てる。また“なんだかわからないもの”は何だかわからないから魅力的なのであると考えられる。何かを仄めかすような表現をするアンゼラム・キーファーの作品、さらに建築装飾の部分などを収集したジョン・ソーンズ博物館を例に挙げ、実体あるものの傍に存在する見えない神秘性と、実体するものの先に在る見えない死などについても述べながら“なんだかわからないもの”「不可視的違和」の魅力について考える。

第四章では、過去から現在に至るまでの自身の作品を辿りながら、違和の表現について言及する。見えない存在を意識した作品、連続した形、左右対称の形へと自身の作品の変遷を辿り、その変化とそこに付随する思いや考えについて整理する。

第五章では、私がここまで取り扱ってきた素材である大理石の作品について触れる。大理石の魅力は、その塊の存在感である。部分を失ったミロのヴィーナスとマーク・クインの大理石の作品を比べ、その魅力と存在感について述べる。また、ルイーズ・ブルジョワの作品と、未完成とされるミケランジェロの『ボーボリの奴隷』の共通点と、その彫り残された量塊の魅力について考察する。

最後に、自身の美術との付き合い方、違和と制作の関わりについて述べ、本論文の結びとする。

私は主に、大理石を彫刻の素材として好んで扱っているが、その最たる理由は、大理石の“そこに在る存在感”である。しかしそれだけではなく“見えない存在感”、つまり何か期待できそうな、内から発する力を感じられるところが大理石の魅力である。

簡単には彫れない石だからこそ、違和感が生じ、向き合う時間ができる。その度に、可視・不可視のイメージを重ね合わせる。そうしているうちに、不確かな存在を感じられるようなものになっていると良いと思う。その作品がどんな形になるのか、最後までわからない。イメージは流動的に変化し、それに伴い彫刻も変化していく。そこに在るもの（作品）に、不確かな存在が、静かに寄り添い浮遊するような雰囲気表現したいと考えている。

(博士論文審査結果の要旨)

内田麻ゆの論文『違和と彫刻 ～デカルコマニーに見る対称性と浮遊するイメージ～』は、筆者である内田が、彫刻の制作を通して思索してきたこと、また彼女の自身の彫刻にこめられたものを解説したものである。

本論文で筆者は、まず「対称性」というテーマから始める。身体をはじめ世界には左右対称のものが多い。美術においても、南大門の金剛力士像、ミケランジェロのメディチ家礼拝の彫刻など、左右対称のものが多くみられる。筆者は、その「対称性」というテーマと取り組む。なにより筆者自身が一卵性双生児という生を受けた存在であり、このような観点は筆者にとって切実なものであったことが窺える。

本論文では、対称性の考察に続き「デカルコマニー」という、左右対称の図像へと論考が進む。これは一章の考察を受けると共に、イメージの曖昧さ、つまり筆者のいう「違和」へと、さらに新しい展開へと進めるためである。その中で筆者は、「デカルコマニーの偶然性」に着目し、そこに彫刻が生まれる瞬間の世界を探ろうとする。さらにアンゼラム・キーファーの作品や、ジョンソーンズ博物館などの具体例を検証しつつ、本論文のテーマを深化させていく。

そして、それらの論考の上に立って、筆者自身の彫刻作品を分析・解説する。筆者の彫刻は、デカルコマニーの手法から出発し、それを大理石で造形する、というものである。なぜ、このような左右対称のイメージの彫刻を作るのか、それがここまでの論考で基礎付けられる。

最後に、筆者は「大理石の量塊」というテーマで本論文を閉じる。彫刻には、木や粘土や金属や石というさまざまな素材がある。石にも、いろいろある。その中で筆者は、石の中でも特に大理石を選んだ理由を説明し、大理石の美の魅力を語る。そして、大理石による左右対称の彫刻、という筆者の彫刻世界をめぐる論考が閉じる。

これまで絵画においては、しばしば左右対称をテーマにした作品はみられた。しかし彫刻において、しかも白い石の塊である大理石において、デカルコマニーの手法を出発点にして、それを造形した例を評者（＝布施）は寡聞にして知らない。そのような独自の方法論で制作された彫刻は、彫刻という造形の可能性を切り開くものであり、それを論考した、この『違和と彫刻 ～デカルコマニーに見る対称性と浮遊するイメージ～』は大いに価値があることが認められる。よって、本論文を本学の博士論文として合格とする。

（作品審査結果の要旨）

内田麻ゆさんは、修了制作時より始めた、デカルコマニーの技法で絵画を描き、そこに形を見つけ出し、大理石に彫り出す手法で彫刻を制作してきた。デカルコマニーの絵画は対称性が在り、その中に発見したイメージは、シュールリアリズムの画家が始めた方法であることもあり、ある意味脈絡がなく、内田さんのテーマである「違和感」を感じさせ、また天地左右は自由になることで「浮遊感」も生みだす。しかし、デカルコマニーで描かれた絵は、左右対称ではあるが全く同じではない。一卵性双生児として生まれた作者にとって、このことは特にシンパシーを感じることであるに違いない。

『GIRLS』『ALICE』『SWAN』の小品3点が先行して制作された。それぞれには、少女、うさぎ、鳥、背骨、顔などが彫られている。デカルコマニーは、ロールシャッハテストという精神分析に応用されているが、内田さんが絵の中から見つけ出すこれらのイメージは、一方で不思議の国のアリスの世界のようでもあり、自身が興味を持っている内臓、解剖へと繋がっているようである。いずれにしても大理石の小品に、作者の心の中にある、「物語」と「違和感」が詰まっているように感じる。

『LILY』は重さ2トン程の大作である。同じ手法で制作を始めたが、現れる像が同じように感じ、制作が進まなくなる悩みを論文に記している。そのような状況で、作者は、大理石と向き合い、石の存在、彫刻の存在を真摯に思考した。ミケランジェロの奴隷シリーズの作品を再検証し、彫り残しの多い作品のほうが、時には語る強さが宿ると感じたようである。『LILY』は、正面の中央に頭巾をかぶった少女、左右にユリの大輪が彫られている。裏に、雌のライオン、鳥などがある。余白が多く、見えない存在を意識し進められたように感じる。結果として、イメージ豊かな物語性に加え、これまで以上に存在感のある作品になったと思う。

今までにないデカルコマニーからイメージを搜し、それを大理石に彫り込むという手法で、魅力ある大変優れた作品を制作したことを、審査員一同高く評価した。

（総合審査結果の要旨）

内田麻ゆは、学部、修士課程、博士課程を通じて一貫して大理石を用い、意欲的かつ積極的に作品制作に取り組んできた。彫刻において、作者と素材との関わりは密接である。内田が大理石を選ぶ理由には物質としての存在感があるが、それだけでなく、内側に「見えない存在感」、内部からの力を感じるからだ。自身がイメージする具体的な形態を直感的に彫り進めながら、素材が持つ質や特性を引き出し、独自の具象的表現を拓げていくのが内田の作品の特徴である。

本研究では、内田がものを見る時、あるいは作る時にふと感じる漠然とした「違和感」が主題となっている。違和という目に見えない「不確かな存在」に輪郭を与えるために、デカルコマニーの技法を用い、

偶然できた左右対称の図像を手がかりに、平面から立体へとイメージを構成し造形していく。長い期間に及ぶ制作の中で、形態はゆっくりと流動的に変化していく。素材とのやり取りを経ることで生まれる「手触り」が定着され、かたちになる。

論文では、デカルコマニーによって現れる図像に、対称性、偶然性、増殖性、を取り上げ考察していく。それらから発生するイメージのブレや違和感が、目に見えない「不確かな存在」として自身の制作のモチーフに繋がるということが述べられる。またその視覚的効果について、歴史や過去の自作を交え論じられていく。論述は、制作を通して感じたイメージやインスピレーションについて率直な言葉で書かれている。作りながら感じる「気配」や「予感」といった微妙な感覚を言語化するのは非常に難しいが、筆者は自己の内面と向き合いながら、慎重に言葉を選んでいる。彫刻の仕事、手で作ることから紡ぎ出された論考として深く共感できる。

作品「GIRLS」「ALICE」「SWAN」「LILY」の4点はいずれもデカルコマニーからのイメージが大理石を素材に彫られている。中でも「LILY」は大きな一塊の大理石の彫刻で、左右対称性と正面性の中に動物や植物のイメージが重層的に構成され彫られている。高い技術と確かな造形力は彫刻としての強度を保ち、丁寧に仕上げられた滑らかなフォルムと、わずかに透明感のある表面は肌理こまかく美しい。彫り残された荒い石肌とのバランスやテクスチャーを上手く使い、不思議な距離感と作者のいう浮遊感を引き出すことに成功している。要素を加え過ぎることで陥りがちなイメージの狭小化に注意をはらい、彫刻としての大きさと量感、素材の強さを維持し、静かで内面的な広がりのある存在感を作り出した。

簡単には扱えない素材に誠実に向き合いながら造形し考察された本研究は、彫刻の新たな視座と可能性を拓けるものとして高く評価できる。

以上のことから、本研究は論文、作品ともに博士学位授与に値すると評価し、審査委員一同、彫刻科教員全員一致で合格と認める。